



— 著書 —

— 同人誌 —



宇部市立高校時代

國學院時代

山口中学時代

増補『私の中の山頭火』（よしの印刷）
『あじす夜ばなし』（四季出版）
『上野英信の生誕地にて』他（よしの印刷）

（所蔵 中野茂樹 / 蒐集整理 中川進）

中野真琴

大正7（一九一八年）	七歳
大正14（一九二五年）	一三歳
昭和6（一九三二年）	一八歳
昭和11（一九三六年）	二二歳
昭和15（一九四〇年）	二四歳
昭和17（一九四二年）	二六歳
昭和24（一九四九年）	三三歳
昭和36（一九六一年）	四三歳
昭和41（一九六六年）	四八歳
昭和42（一九六七年）	四九歳
昭和44（一九六九年）	五一歳
昭和45（一九七〇年）	五二歳
昭和46（一九七一年）	五三歳
昭和47（一九七二年）	五四歳
昭和49（一九七四年）	五六歳
昭和53（一九七八年）	六〇歳
昭和54（一九七九年）	六一歳
昭和57（一九八二年）	六四歳
昭和58（一九八三年）	六五歳
昭和60（一九八五年）	六七歳
昭和61（一九八六年）	六八歳
昭和62（一九八七年）	六九歳
昭和63（一九八八年）	七〇歳
平成3（一九九二年）	七三歳
平成4（一九九二年）	七四歳
平成8（一九九六年）	七八歳
平成10（一九九八年）	八〇歳
平成13（二〇〇二年）	八三歳
平成23（二〇一一年）	九三歳

中野真琴 年譜

阿知須縄田に父祥松、母トヨの二男として生まれる。
（長男早逝のため事実上長男）
阿知須小学校入学。
山口県立山口中学校入学。
國學院大學入学（国史科専攻）。
一カ年休学。
山口県立小郡農業学校教諭。
宇部市立高等学校（現宇部中央高等学校）教諭。
山口県立徳佐高等学校教頭。
山口県教育委員会文化係長。
山口県立小野田高等学校教頭。
『あじす史話』刊行。
山口県立下関西高等学校教頭。
豊浦養護学校開設準備担当。
山口県立豊浦養護学校校長。
『中野真琴作品集』刊行。
阿知須町教育委員会在任（町史編纂に従事・昭54年8月まで）。
『私小説とエッセイ』―病弱・虚弱養護学校にて―刊行。
『私の描いた山口の文学者たち』刊行。
梅光女学院大学短期大学部助教授（昭和62年3月まで）
『中野真琴短篇小説集』刊行。
『海隅の村』刊行。
『綴晶しなばたけ』刊行。
『山口という地方での文学雑誌』刊行。
『芥川竜之介の「將軍」その他』刊行。
『迷って来た鳥の話』刊行。
『あじす夜ばなし』刊行。
『学校の隅での落書き』刊行。
宇部短期大学非常勤講師（平成3年まで）
『私の中の山頭火』刊行。
『宇部岬海岸で捕えられた海賊』刊行。
『上野英信の生誕地にて他』刊行。
『蜘蛛のえば』刊行。
『身辺小説集』刊行。
山口県文化功労賞受賞。
『文読む月日重ねつつ』刊行。
増補『私の中の山頭火』刊行。
『悲しき征衣・青木盛久大使の祖父他十五篇』刊行。
1月25日逝去。

（提供・中野茂樹）

地域文学

なかのまこと
中野真琴

山口市
（1918～2011）



提供・中野茂樹

【著作】

『あじす史話』（昭和44・阿知須町役場）
『中野真琴短篇小説集』（昭和57・宇部市条例出版）
『山口という地方の文学雑誌』（昭和58・宇部市条例出版）
ほか

中野文学は、生まれ育った阿知須の文化風土が原点となっているようである。真琴の命名者は、現在「いぐらの館」で知られる旧中川家住宅の当主であった大伯父の中川令辰。氏は、明治二十五年十月に阿知須で発行された評論雑誌『周年』を出版した人物である。大正十一年には、文芸誌『里の鐘』が刊行される等、阿知須の文芸風土をうかがわせる。

そうした土地柄で育った真琴は、昭和六年、県立山口中学に入学すると、当時文壇で注目されていた仁保出身の嘉村磯多の作品を愛読するなど文学熱は次第に高まり、昭和十年、阿知須で『郷土』と称したガリ版刷りの同人誌発行に及ぶ。

國學院大學に進んだ真琴の文学熱は更に進み、同人誌『十人』に加わり編集委員として参加。重ねて『文陣』にも加わる。学部に入ってから、『渋谷文学』に参加するなど、文学熱は愈々盛んになる。そうした中、父の死と自身の病氣のため、一年休学の止むなきに至る。だが、その間にも『渋谷文学』に随想「秋の海辺」「無人島」を送っている。共に季節感の漂う静かな筆致で、それまでの精進の程をうかがわせる作品である。

因みに真琴が公にした著作の第一冊は、昭和四十四年刊の『あじす史話』である。町長からの依頼であったが、書名を『阿知須町史』とはせずに敢えて『あじす史話』としたところに、文芸の目線で郷土を語る思いが伝わる。

やがて中野は、山口県内の文芸へと視野を展げ、『私の描いた山口の文学者たち』（昭和五十三年）・『山口という地方での文学雑誌』（昭和五十八年）等々を刊行。常々地方紙や県内の同人誌等にこまめに

書きためていたものを教師生活が一段落したところから整理し、新たな作品集の数々を逐次発行に及んだことは、年譜に示した通りであるが、総冊数は二十冊に及び、すべて山口生まれの本である。

中野の教師生活で生涯の出会いとなったのは、宇部中央高校の前身、宇部市立高校での古川薫。

「学校の機関誌『里程標』が創刊されたのは、中野真琴先生着任後間もなくのことである。：：中野先生を加えてある種の文学学校の雰囲気があったよいはじめたころ、そこに在学していたということは実に幸運だった。ぱくには運命的な中野先生との出会であった」と『山口新聞』（昭・五十七年六月二十一日）の「青春の挽歌『弟の出發』」の作品評の中で述懐している。

この作品に対する古川薫の寄稿は異例の十二段組というもので、直木賞候補作家として活躍中の氏の寄稿は読者の注目を集めたものと思われる。ここでは紙面の都合で左記に留めたい。

肉親への愛情、そして家の桎梏^{しごく}を荷った長男という個を通して、作者の目はその背景世界にむかつて鋭く突き刺さっている。「弟の出發」にたゞよう人間のかなしみは大陸に送られて行く幼い弟への惜別だけでなく、いたいけな少年にまで及ぶ戦争をする国家^{こくが}に対する怒りや嘆きが重なって共鳴するところに重厚な味わいがある。

（弟の出發は昭和十六年「早稲田文学」初出。）
振り返ると中野・古川両氏の絆は『里程標』以来六十二年。古川は中野との永訣に次の句を手向けた。

文士ゆくなほ一筋に雪の道

（文・多田美千代）